

文化学園服飾博物館だより

Vol.33

2020.3.1

編集・発行 文化学園服飾博物館

- 40周年を迎えました…………… 1
- 2019年度の活動報告…………… 2
- 特 集…………… 3
- 2020年 展示のご案内…………… 4

文化学園服飾博物館は40周年を迎えました

～ 昭和から平成、そして令和へ～

服飾博物館の母体である学校法人文化学園は、大正12年(1923)に創設され、日本の服飾教育の中心を担ってきました。学生への教育の充実を目的として博物館設立の構想が具体化した昭和40年代、当初は所蔵資料も現在ほど充実しておらず、学園内の建物の1部屋を改装した「服飾資料室」で小規模の展示を行い、並行して博物館設立に向けての準備を進めました。そして昭和54年(1979)11月、学園内に2フロアー、4部屋の展示スペースを設けた服飾博物館が開館しました。作り付けの展示ケースやのぞき型のケースが配備され、大学附属の博物館として本格的に所蔵資料の公開をするようになりました。

展示の経験を重ねながら時代は平成へと移り、服飾博物館の活動は大きく前進していきました。服飾を展示するためのノウハウが培われ、さまざまなアイデアも生まれ、現在につながる服飾博物館の展示の基礎が築かれました。また、新たな取り組みにも積極的に挑戦していきました。自館での所蔵資料の展示以外に、国際交流やコレボレーション展示など、外部に向けた発信活動がさかんになったことで、認知度も高まりました。平成13年(2001)からはデータベースを公開し、服飾博物館の所蔵品が服飾関係者はもちろんのこと、服飾以外の分野の方々にも広く役立てられるようになりました。平成15年(2003)、学園創立80周年を記念し、服飾博物館は現在の甲州街道沿いの施設へと移転し、ロビーや情報コーナーを備えた明るくモダンな施設となりました。展示環境も改善され、空調やLED照明などの設備も整いました。



2003年に現在の施設に移転。モダンなロビー。

昭和から平成、そして新たな令和の時代に移り、博物館を取り巻く環境も変化しています。令和5年(2023)には文化学園は創立100周年を迎えます。これからも「衣を通して日本と世界の文化を知る」をテーマに、服飾・染織の専門博物館として、オンリーワンの存在を目指していきたいと思えます。



現在の展示室。さまざまな国や地域の服飾を分かりやすく展示する。



三笠宮崇仁親王殿下をお迎えしての開会式(1979年11月)



開館当初の展示室(1979年)



1986年から8回にわたり、ソビエト連邦の各共和国の衣装展を開催。当時の日本ではなじみの少ない地域の衣装も積極的に紹介。



展示の雰囲気づくりを工夫し、展示品を生き生きと見せる。(1992年)



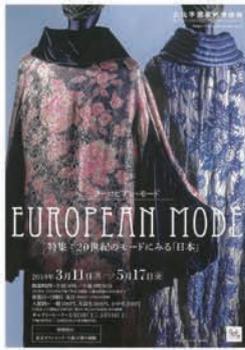
1990年代には、看板やポスターはスタッフがデザインし、学芸員課程の実習生とともに製作していた。(写真は1996年)

文化交流事業として海外での展覧会の開催。
左：在ブルガリア日本大使館主催「日本のきもの展」(2002年)
右：パリ市主催「バガテル庭園きもの展」(2008年)

ヨーロピアン・モード

3月11日～5月17日

18世紀ロココ時代から20世紀末まで、ヨーロッパを発信元とする約250年の女性モードに焦点をあて、その流行と変遷を、社会構造の変化や産業の発達といった背景とともに紹介しました。また特別出品として、当時の欧米の流行が反映された東京オリンピック(1964年)と大阪万博(1970年)の制服を展示しました。第2室では、特集として「20世紀のモードにみる日本」を取り上げ、着物の形や文様から発想し、新たなクリエイションを展開したドレスやコートを展示しました。



世界の絁

6月14日～9月10日

絁は素朴な幾何学文様から複雑で精緻な具象文様までさまざまな表現が見られます。本展では、日本をはじめ、24か国の多様な絁を紹介しました。世界各地の絁を一堂に展示することは、さまざまな地域の服飾資料を所蔵する当館ならではの企画といえます。絁という一つの染織技法に注目することで、地域による特徴や違い、地域を超えた共通点などが浮かび上がり、さらに交易や文化交流といった人と社会の結びつきも影響していることが分かりました。



能装束と歌舞伎衣裳

10月7日～11月29日

当館所蔵の彦根藩主・井伊家旧蔵の江戸時代・明治時代を中心とした能装束と、松竹衣裳株式会社の所蔵する現代の歌舞伎衣裳を併せて展示しました。能と歌舞伎はともに伝統芸能でありながらその成立は異なり、衣裳にも違いが見られます。これらの衣裳を同時に展示することで、その違いが浮き彫りになると同時に、舞台衣裳ならではの共通性も認識できました。能装束と歌舞伎衣裳が同時に展示される機会は稀で、普段は客席からしか見ることのできない衣裳をじっくりと見る良い機会となりました。



ひだー機能性とエレガンスー

12月20日～'20年2月14日

ひだには、布を体のラインにフィットさせるため、動きやすくするため、気候風土に適応させるため、といった機能性の追求の他、装飾性やフォルムの追求のために用いることもあります。展示では、ひだが作り出す機能性とエレガンスに焦点を当て、世界各地の民族衣装やヨーロッパのドレスなどを紹介しました。それぞれの民族の知恵と工夫によって衣服の機能性が高められていたり、造形的な面白さを追求したりと、ひだの持つ意味やさまざまな活用法を知ることができました。



ピエール・カルダンのドキュメンタリー映画製作に協力

5月27日、服飾博物館ロビーにおいて、ピエール・カルダンのドキュメンタリー映画の撮影が行われました。モダンな雰囲気のあるロビーをバックにし、服飾博物館と文化学園ファッションリソースセンターの所蔵するピエール・カルダンの作品、6点が並びました。



撮影の様子

渋谷ハチコウ大学に協力しました。

渋谷ハチコウ大学は、渋谷区の大学や企業と連携し、学びの機会を提供する区民大学で、文化学園では大学連携講座を行っています。11月18日には、展示中の「能装束と歌舞伎衣裳」を学芸員の解説のもと鑑賞しました。16名の参加者は、皆熱心に話に耳を傾けていました。



『世界の民族衣装図鑑』を刊行しました。

文化学園服飾博物館の編著による『世界の民族衣装図鑑 約500点の写真で見る衣服の歴史と文化』が6月30日にラトルズより刊行されました。本書は文化学園服飾博物館の所蔵品の中から約70か国の民族衣装を国別に紹介し、さらに技法や文様など、さまざまな視点からも民族衣装を掘り下げています。



『世界の民族衣装図鑑』
¥2,980 (税別・ラトルズ)

民族衣装の着装写真をご寄贈いただきました。

長年にわたって世界各地の染織品を訪ね歩き、民族衣装を着た現地の人々の写真を撮影してこられた野口文子氏から、写真をご寄贈いただきました。写真は1978年から2010年までに撮られたもので、インドやグアテマラ、タイなど、7か国、約300点にのぼります。染織や服飾という視点で撮影された写真は、民族衣装を展示する上でも貴重な資料となり、それぞれの民族の姿を生々しく伝えていきます。



寄贈された写真の一部
◎ 野口文子 / 文化学園服飾博物館

文化学園服飾博物館を支えるプロフェッショナル。

昨年40周年を迎えた服飾博物館では、これまでに170を超える企画展を行い、さまざまな服飾文化を紹介してきました。その陰には多くの方々の支えがあることは言うまでもありません。ここでは長年にわたって博物館の活動に携わってこられた2名のプロフェッショナルにお話を伺いました。

フォトグラファー

田中 民子 Tamiko TANAKA

文化学園服飾博物館の染織資料を1980年から撮影。布を知り尽くし、布の持つ美しさや繊細さを引き出す。



約40年にわたって布と向き合う。

もともと建築物を中心に撮影していましたが、縁あって服飾博物館での撮影に携わることになりました。最初の仕事は三井家旧蔵の打掛の撮影でしたが、織地の模様や刺繍のすばらしさに圧倒されました。布との出会いはこの時からで、当時の館長から収蔵品をすべて撮影するのでもってほしいと言われ、現在に至ります。もう人生の半分以上、布に関わっていることになりました(!)。

布を表現することの難しさ。

布は1点1点違い、それぞれに個性がありますが、撮影する資料と対面するのは撮影当日になります。布をよく見て、短時間で長所を見極め、長所を引き出すように心掛けています。資料に照明を当ててフレームに入ると、生き生きとしてくる感じがします。撮影するものがドレスであれば、どんな人が着たのだろうか、とイメージをふくらませつつ、より魅力的に見えるように、と考えるながらアングルを探します。どんなものにも必ず長所があり、それを見つけることはとても楽しい作業です。また、布は平面的なものと思われるかもしれませんが、例えば紋織物は織組織によって模様を表していますし、刺繍は布の上に糸を渡しているの、薄い布にも凹凸はあり、それらを二次元の写真に表現することは容易ではありません。布は繊細さと力強さを持ち合わせ、照明の当て方や機材の使い方、アングルによって全く異なる表情を見せるため、撮影は一期一会です。以前に撮影した写真を見ると、反省すべき点が多くあり、布を撮ることの難しさを痛感しています。

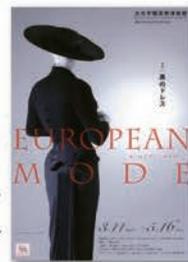
服の多様性に驚く!

約40年間撮影をする中で、さまざまな国、時代の布や衣装と出会いました。さながら飛行機に、そしてタイムマシンに乗って旅をしているようです。衣服を通して異文化を理解することができ、普通では見られないようなものをたくさん見ることができたことは、ありがたい経験です。撮影していて気づくことは、世界の服飾はなんと多様性に富んでいることかと! 記憶に残る服はヨルダンのドレス。丈が3.5メートルもあるため、撮影には天井の高い施設を借り、ローリングタワーに乗って挑みました。世界には想像もつかないような服があり、飽きることはありません。

自分の視点も大切に。

博物館の撮影には、基礎となるデータベース用の写真、チラシなど広報物の写真、図録用の写真など、目的がいくつかあるので、それぞれにあった撮影をすることを心掛けています。例えば、データベース用であれば、長所と短所すべてがわかるように、また広報用であれば、長所を最大限に引き出し印象に残るように、と。仕事をやる上で大切にしていることは、とにかくクライアントから要求されたアングルやカットでの撮影に応えるのは当たり前ですが、自分なりに少し違った視点を入れたものも撮影してみることにしています。結果的にそのカットがセレクトされることもありますね。

これまで困難な撮影もありましたが、課題をクリアする方法を考えることも楽しいですし、クリアできた時の達成感! これが長年続けてこられた秘訣のかな、と思います。



印象に残る1枚

ポスターに使われたドレスの写真。ドレスの「顔」でもある前面を大胆に隠し、照明を前方に当てることで、背面のシルエットの美しさが印象的なものとなる。

デザイナー

松本 章 Akira MATSUMOTO

文化学園服飾博物館のチラシやポスターを2004年から手がける。展示によって異なるコンセプトを的確に表現し、服飾博物館のイメージを作り上げている。



15年間、59回の制作に携わる。

私は2000年に文化学園大学に教員として着任しました。そして4年後の2004年の6月に開催された「友禪 伝統と創造 熊谷好博の世界」の展示から、博物館の広報物のデザインを前任者から引き継ぐことになりました。最初に博物館にご挨拶にうかがった時に学芸員の方々から、博物館の研究・教育施設としての位置付けや、収蔵品についてのお話を興味深くお聴きしました。以後15年に渡りこれまでに59回の展示の広報デザインに関わっています。

デザイナーとして、教員として。

私にとって博物館展示の広報デザインに関わる楽しみは二つあります。一つは毎回の展示企画をどう視覚的な告知媒体として効果的・魅力的なデザインにまとめ上げるかという、グラフィックデザイナーとしての立場からの楽しみ。そしてもう一つは、自らが手がけたデザインの着想や制作プロセスを、授業を通して学生たちに具体的な事例として伝える教育者としてのものです。毎回のデザインについては、正直に言って我ながらうまく表現できた満足できた時と、なかなか思うような表現に着地できなかった悔しさを残したものとがあります。それは企画内容についての理解度やそれを構想する私の技量によるところが大きいのですが、写真や文字の選択、その処理や配置の判断など、長くデザインを生業にしてきた今でもまだまだ戸惑うことも多く反省する日々です。授業で取り上げる時にも、そういった制作上でこずったことなどを話すことで、学生たちに制作現場のリアルな過程が伝わるようにしてい

ます。大学では年に数回「教員作品展」が学内で開催されていますが、私の場合は年間を通してポスターが学内・学外に掲示されたり、広くチラシが配布されたり、また甲州街道に面して大型のエントランスポスターがディスプレイされるなど、さながら「ひとり教員作品展(?)」といった感じで常に外部の眼にさらされています。そういった意味では時々いただく教職員の方々のご指摘やご感想、学生たちの反応などが励みにもなっています。

「らしさ」をデザイン。

基本的に年に4回、ポスター、チラシ、エントランスポスターの3アイテムのデザインを制作しています。共通したデザインをそれぞれのアイテムのサイズに合わせて微調整しながらまとめていきますが、デザインの基本的な考え方としてはいかに「らしさ」を表現するかということに尽きます。その「らしさ」には二つの意味があって、ひとつは毎回の展示内容に適した「らしさ」、つまり扱うテーマによって異なる時代性や地域性などをわかりやすく視覚化すること。またもうひとつは、学園の附属博物館としての「らしさ」です。それはたとえポスターやチラシの目的が集客とはいえ、研究や教育のアカデミックなイメージを損なわないように配慮することです。

教員を長く続けていると日々の教育活動に追われ、デザイナーとしての職能的な動や時代感覚のようなものが鈍ることがあります。その点では、博物館のデザインに継続的に携わっていただいていることが、私自身の制作活動や教育活動において常に謙虚な気持ちでデザインと向き合える大切な自己研鑽の場になっているのです。



「赤い服」のチラシデザイン

2009年に開催された展示「赤い服」では、あえて文字だけで構成した。展示企画の何を訴求し、素材をどう料理するが、毎回悩みながらも楽しんでいる。

3月11日(水)～5月20日(水) * 4/5は開館
4/17、5/15は19:00まで開館
ヨーロッパ・モード

ヨーロッパのドレスは、それぞれの時代でスカートの形や丈、袖の大きさなどに流行が見られます。これらの流行は、女性の好みやデザイナーの創造力のみによるものではなく、政治的、経済的、社会的な要因が密接に関係しています。本展では、宮廷が流行を生み出した18世紀のロココ時代から、産業の発達や社会の成熟とともに変化する19世紀を経て、若者や大衆が流行の担い手となった20世紀末まで、ヨーロッパを発信元とする約250年の女性モードの変遷を、その社会背景とともに紹介します。また特集として、1960-70年代のモードを取り上げます。戦後世代の若者が発信する新たな感覚や自由な発想から生み出されたドレスを展示します。



7月18日(土)～9月8日(火) * 7/19、8/23は開館 夏期休館=8/7～16
7/31、9/4は19:00まで開館
日本服飾の美

文化学園服飾博物館は昨年開館40年を迎え、これまでにさまざまな地域の服飾資料を収集してきました。夏季展覧会「日本服飾の美」を中止とし、この期間は春季展覧会「ヨーロッパ・モード」を開催する予定です。本展では、江戸時代後期の町家の着せかえ文化や、武家の打掛、公家の伝統を受け継いだ近代の宮廷衣装、簡素な中にも潔さの漂う江戸時代後期の武家の服飾などを紹介します。それぞれの制度やしきたり、気風から生み出された服飾には、精緻な染織技術や優美な意匠が見られます。独特の美意識を持つ日本服飾の優品が、一堂に会します。



10月2日(金)～12月18日(金) * 11/1、3は開館、11/4、5は閉館
10/16、11/13は19:00まで開館
世界の藍

藍は世界中で古くから用いられている植物染料です。地域によって蓼藍、琉球藍、インド藍、大青など使用する植物の種類や染色法は異なりますが、比較的手軽に染めることができるため、基本の染料として広く親しまれてきました。そして、絞り染や型染、ろうけつ染といったさまざまな技法と組み合わせたり、他の色の染料を重ねて染めたりすることによって多彩な表情を見せます。本展では、日本、アジア、アフリカ、中米など、約40か国の藍染の衣装や布を紹介し、それぞれの地域で藍染がどのように取り入れられてきたのかを探ります。



- ❗ 5月21日～7月17日まで展示ケースの補強工事に伴い閉館いたします。ご了承下さい。
- ❗ 上記予定は都合により変更される場合があります。最新の情報はホームページでご確認下さい。

利用案内

- ◆ 開館時間 10:00～16:30
(各展示会期中2回、19:00まで開館 入館は閉館の30分前まで)
- ◆ 休館日 日曜日、祝日、夏期・年末年始、展示替の期間
- ◆ 入館料 一般500円・大高生300円・小中生200円
*20名以上の団体は100円引、障がい者とその付添者1名は無料
- ◆ 交通 JR/京王線/小田急線 新宿駅(南口)より徒歩7分
都営地下鉄 新宿線/大江戸線 新宿駅(新都心口)より徒歩4分



文化学園服飾博物館

〒151-8529 東京都渋谷区代々木 3-22-7
TEL. 03-3299-2387
<https://museum.bunka.ac.jp>

100 学校法人文化学園
BUNKA GAKUEN 文化学園は2023年に創設100周年を迎えます。
文化学園大学/文化ファッション大学院大学/文化服装学院/
文化外国語専門学校/文化出版局/文化学園服飾博物館